

## 善意と文学 —— 語りの「丁寧」をめぐって

### 第13回

### ジェーン・オースティンの不機嫌（上）

阿部公彦

Abe Masahiko

18世紀から19世紀にかけ、英国の「礼節」は大きな転機を迎えることになった。前回まで扱った『チェスタフィールド卿の手紙』(1774)に垣間見える“ねじれ”は、その兆しとみなすことができるだろう。作法の何たるかがわかればわかるほど、やさしい振る舞いにこめられた毒には無意識でいられなくなる。チェスタフィールド卿も一方で作法を指南し、細かい気遣いのポイントを説きながら、同時に、作法の裏を見透かすような懐疑的な視線を持っていた。「見かけ」へのこだわりの奥にあさましさや偽善性がひそんでいることを十分認識していたのである。

では、作法に根ざすこのような“ねじれ”はその後どうなっていくのか。本稿では続く時代に書かれたジェーン・オースティンの代表作『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*)をとりあげて考察してみたい。『高慢と偏見』は刊行は1813年だが、その元になった「第一印象」(“**First Impressions**”)は1796年から1797年にかけて執筆されており、刊行時に物議を醸した

『チェスタフィールド卿の手紙』が、作法書として広く一般に出回っていた時期に構想されたものと考えられることができる。実際、『チェスタフィールド卿の手紙』には「高慢と偏見」(**pride and prejudice**)という表現が出てきており、それがこの作品のタイトルの由来だとする批評家もいるほどである(タンドン、247)。いずれにしても『高慢と偏見』に限らず、19世紀のはじめに相次いで刊行されたジェーン・オースティンの小説に『チェスタフィールド卿の手紙』で言及されるような、作法の虜になった人々の振る舞いがふんだんに描き出されているのは間違いない。オースティンがチェスタフィールド卿をお手本にしたかどうかはともかく、両者は「善意」の表現について、その“ねじれ”の部分も含めて、かなり意識を共有していたとみなすことができそうである。

### 『高慢と偏見』を読むという苦行

『高慢と偏見』は一面的な読み方をされがちな作品である。その理由のひとつは、まるでチェスタフィールド卿の教えを実践に移そうとするかのように、この小説が徹底して些末な「表層」にこだわるからである。作品には人々の振る舞いの描写があふれ、頻繁に「丁重な」(**civil**)、「丁寧な」(**polite**)、「快い」(**agreeable**)といった言葉が使われる。人物たちはつねに礼節のコードに照らして「適切」(**propriety**)かどうか判定され続けているかのようなのである。人物たちにしても語り手にしても、作法のコードから自由になれていないのではないかと思わせる。

たとえば作品の中心人物であるジェーンとエリザベスの姉妹が、初めてビングリーやダーシーと舞踏会で会ったときのこ

と。ジェーンはすっかりビングリーの虜になって、妹のエリザベスと二人きりになるとさっそくその魅力について語りはじめるのだが、その言葉は驚くほど非個人的で平坦である。

「まさに若い男性の鏡ね」ジェーンは言った。「趣味が良くて、人当たりもいいし、明るいし。あんなにすてきな人見たことないわ。気取らないし、それでいてきちんとしてるし」(15)

ちなみにこの部分の原文は以下のとおりである：“**He is just what a young man ought to be,**” said she, “**sensible, good humoured, lively; and I never saw such happy manners!**— so much ease, with such perfect good breeding!” (16) 拙訳では、英語の原文にある “**I never saw such happy manners!**” という部分はあえて逐語訳せずに「すてきな人」としたが、**manners** という言葉がある以上、「すてきな物腰の人」とか「すてきな態度の人」と訳すべきなのかもしれない。しかし、男性の魅力について語る女性が「すてきな物腰」とか、ましてや「すてきな態度」といった表現を使うのは、現代の我々からするとかなり違和感がある。フォーマルな場での発言ならともかく、この会話は舞踏会の後で、ジェーンとエリザベスが二人になってからこっそりかわされる、いわば“ガールズ・トーク”の一節なのであり、もっと生々しい本音が語られてもいいはずなのだ。そんなときに「物腰」や「態度」を云々するのは、いくらジェーンがおっとりして、控えめで、言葉が足りなくて、多少愚鈍でさえあるかもしれない人物として設定されていることを差し引いたとしても、じれったいと言わざるをえな

い。いかにも「型」の支配から逃れられない思考と見える。<sup>1</sup>

しかもこのような違和感は、必ずしも文化の違いにのみ帰せられるものではなさそうなのである。オースティンとそれほど時代的に隔たってるわけでもないシャーロット・ブロンテ (1816-55) も、『高慢と偏見』には我慢がならなかった。

何かと思えば、どこにでもいそうな顔を銀盤写真機できっちり撮ったような肖像と、注意深く扉を張り巡らせた手入れの行き届いた庭に、こぢんまりした花壇ときれいな花ばかり。生き生きした鮮明な表情もなければ、広々とした田園も、気持ちのいい空気も、青々とした丘も、元気な挨拶もない。あんな紳士淑女と一緒に、優雅ではあっても息のつまるような家に住みたいなんて、とても思わない。(10)

ブロンテのこの批判は明らかに **manner** という語に象徴されるオースティン的な形式張った表層へのこだわりに対する苛立ちに発したものである。小説はそんなものではないでしょうか？ というブロンテの声が聞こえてくるかのようだ。この問題提起にはたしかに説得力がある。

おそらくジェーン・オースティンの小説を読むためには、こうした表層性と付き合うことが不可欠なのである。歩き方やしゃべり方や挨拶の仕方といった些末な振る舞いの描写のいちいちを楽しめないとするなら、『高慢と偏見』を読み続けるのは苦痛そのもの、苦行にも等しいだろう。それだけこの作品の描写は徹底して表面にこだわったものなのである。人物を描写す

<sup>1</sup> オースティン作品における細部の描写の欠如については、不十分な照明の下で創作を続けたことに起因する、作家の視力の低化を原因としてあげる見方もある (ホッジ、66-67)。

るに際しても、その「性格」(character)は明晰な言葉できちんと整理されて語られるため、多少の皮肉や意地悪が混じっていたとしても、最終的には小説世界が安全で無菌の状態に保たれているような印象を与える。しかもこの無菌性ゆえにこそジェーン・オースティンの世界を愛するという人は少なくない。

### みんな好きだけど、やっぱり嫌い

しかし、このような読み方が一面的であることはすでに早くから指摘されてきた。その代表例はD・W・ハーディングの「統御された嫌悪」(“Regulated Hatred”)である。「スクリュエティニー」第8号(1939-40)に掲載されたこの有名なエッセーは、80年近く前のものであるにもかかわらず、今読んでもいささかもその精彩を失っていないだけでなく、近年の“学術論文”にはなかなか期待できない柔軟さと洞察に満ちた、非常に力強い論考になっている。

ハーディングの論点は大きく分けてふたつある。ひとつは、ジェーン・オースティンの小説が一見優雅で楽しい軽やかな諷刺性に満ちていると思える一方で、そこには実は亀裂があるということ。もうひとつは、オースティンのプロットには「母嫌い」のテーマが埋め込まれているということである。ひとつ目の論点はふたつ目ともつながっていくのだが、ここでは主にエッセーの前半で扱われていることに触れてみたい。

ハーディングがまず注目するのは『ノーサンガー寺院』の一節である。主人公キャサリンに対してヘンリー・ティルニーがちょっとしたお説教をしている箇所なのだが、一見、二人の日常世界の堅牢さを強調しているかのようなその口調の端に、ふ

と妙な一節がまぎれこんでいるというのである。ふつうの読者ならうっかり見逃してしまうような一節。そしてそれを見逃すことでこそオースティンを誤解し、しかもこの誤解ゆえにこそいつそうオースティンを愛してしまう。しかし、オースティンをきちんと読むためにはまさにそこを見逃してはいけないとハーディングは言う。

それは以下のような部分である。

そんな恐ろしいことがこのような国で誰にも知られずに全うできると思うのかい？ だってこの国じゃ、お付き合いやら手紙のやり取りがすごく頻繁で、自発的にスパイを買って出た連中に誰もが見張られていて、道路と新聞のおかげで何でもかんでも白日の下にさらされてしまうんだよ。

ハーディングがとくに注意を引くのは「自発的にスパイを買って出た連中に誰もが見張られていて」という箇所である。非常に上手にコンテクストにおさめられているので目につかないかもしれないが、この部分には不穏なものが露出しているというのである。それはヘンリー・ティルニーという人物像にはおよそ似つかわしくない毒に満ちた発言であり、ヘンリーの言葉というよりは作家ジェーン・オースティンに発するものなのではないか、そこには諷刺喜劇の粋にはとてもおさまらないようなオースティン自身の嫌悪が露わになっているのではないかとハーディングは考える。その嫌悪が向けられているのはオースティンを取り巻く現実世界の人々であるが、そのような人々とそれでもなお付き合いがいかねばならないことからくるもやもやした感情が、きれいに磨き上げられた作品から漏れ出しているというのである。

しかし、この「漏れ」は決して作品の欠陥ではない。むしろ、この亀裂にこそ、オースティンが小説を書く際の大事な動機が隠れている。オースティンの人生が抱える根本的な矛盾を、ハーディングは次のようにまとめてみせる。

オースティンの目的は伝道師めいたものなどではなかった。周りの人の欠点が目についてしまう自分の性格に、何とか正当なはけ口を見出そうと必死だっただけなのである。オースティンにとってまず必要だったのは、日々の生活で接する人たちとほどほどに仲良くやっていくことだった。彼女にはそういった人たちの情愛がどうしても必要だったし、そういった人たちが支えてくれる、秩序あるきちんとした生活をとっても大事に思ってもいた。しかし、オースティンはまた彼らの低俗さやうぬぼれも気にせざるをえなかったのであり、ほんとうの自分がそうした彼らの特性にまつわるさまざまな価値を拒絶することでこそ守られるのがわかっていた。小説を書くことで、彼女はこのジレンマから抜け出すことができたのである。(11-12)

こうした「ほんとうの自分を守るための毒抜きとしての執筆」という視点は、単にオースティンの小説の成り立ちを説明するだけではない。「そもそも小説とは何か？」という、より広い問いを立てたときに、このような個人対社会という図式がたいへん有効なものであることは、20世紀以降の文芸批評の中でこの葛藤を軸にした読解が頻繁に行われてきたことからもうかがい知れるだろう。<sup>2</sup> たしかに「みんなが好きだ。愛されたいし、守られたい。でも、実はみんなが嫌いだ。自分だけはちょっと違うから」という、ある意味身勝手とも言える「葛

藤」は、近代人の多くが自覚的に抱える問題にほかならず、それだけに、なぜ近代社会で「小説的なもの」がやや特権的な地位を与えられてきたかを説明するのにも便利だったのである。近代小説というジャンルは、個人の特殊性に寄り添いその苦悩を代弁することで、皮肉にも「他の誰とも違う私」という特殊性を普遍化するような文化の装置として機能してきた。

ただ、ここで「葛藤」という表現を用いるのがどれだけ妥当なのだろうか。あるいは私たちはあまりにわかりやすい自己実

---

<sup>2</sup> オースティン批評でも、20世紀に入るとこうした「個人対社会」の枠組みに沿った議論が力を得るようになる。そこで提示されるのは、最終的には伝統的な価値観に回帰してしまう諷刺喜劇作家としてのオースティンではなく、因習や伝統の中でひそかに孤立し、既存の価値の転覆をはかるような、危険な作家としてのオースティンだった。マツイーノはこのような読みを支えたのがフォルマリズムとヒューマニズムに基づいた批評であり、とりわけマーヴィン・マドリックの『ジェーン・オースティン——防衛と発見としてのアイロニー』(1952)の果たした役割は大きかったとしている(70)。たしかに、ホッジの『ジェーン・オースティンの二重生活』にも典型的に見られるように、表向きは社会と折り合いをつけつつも、根深いところで軋轢に苦しむ孤独な芸術家というオースティン像は、20世紀の後半以降頻繁に描かれてきたものである。ただ、興味深いのは、ホルパリンのようにオースティンのアイロニーの攻撃性に注目する論者でも、最終的にはオースティンのバランス感覚や「精神の健康さ」(79)といった日常的な感覚に立ち戻るということでもある。オースティンの作品に社会との葛藤を読み込もうとする批評は、概して小説というジャンルそのものに対する信頼感にあふれ、オースティンを理想化されたモデルとして活用しようとする傾向があるのかもしれない。

現のモデルを導入してジェーン・オースティンの悩みを普遍化することで、別の意味での「誤読」に足を踏み入れているのかもしれない。今回はそのことについて考えてみたい。

### 〈文 献〉

\*『高慢と偏見』のテキストは、以下のケンブリッジ版を使用した。*Pride and Prejudice (The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen)*, ed. by Pat Rogers (Cambridge: Cambridge U.P., 2009)

Brontë, Charlotte. *The Letters of Charlotte Brontë, vol. 2, 1848–51*, ed. by Margaret Smith (Oxford: Oxford U.P., 2000)

Chesterfield, Lord. *Letters*. Ed. by David Roberts (London: Oxford U.P., 1992)

Harding, D.W. “Regulated Hatred: An Aspect of the Work of Jane Austen,” *Scrutiny* 8 (1939–40), 346–62. / in *Regulated Hatred and Other Essays on Jane Austen*, ed. by Monica Lawlor (London: Athlone P., 1998)

Hodge, Jane Aiken. *The Double Life of Jane Austen* (London: Hodder and Stoughton, 1972)

Halperin, John. *The Life of Jane Austen* (Sussex: Harvester P., 1984)

Mazzeno, Laurence W. *Jane Austen: Two Centuries of Criticism* (Rochester, NY: Camden House, 2011)

Page, Norman. *The Language of Jane Austen* (Oxford: Basil Blackwell, 1972)

Southam, B.C. *Jane Austen’s Literary Manuscripts: A Study of the Novelist’s Development through the Surviving Papers*.

New edn. (London: Athlone P., 2001/1964)

Tandon, Bharat. *Jane Austen and the Morality of Conversation* (London: Anthem P., 2003)

(東京大学准教授)